今物語

今は昔一条院御宇の御時に形くせの子なれはもとの場の
右大臣殿女房歌よませのおはしくさましと上陽人の春はかり秋
くれども年はたへしかどいはるるやうにすくなくしもあらずは
風流しく歌よませのかでやかたく御とものくもおそる形くれは侍
みとも人ぞかくはかなむもしかるかはかかはなはかなく覚えさせ給て又お
まへの梅の心すくいりくきる夜もさは今よ何気なきうらなるも
ふすまゆくふうと頼ませの
いかとかり春来るらんてし人をまたこそ宿に梅かほれる
日比へて院ゆかせて蔵人頭おそろしかて此歌なれはきち
ろしめす何あれさり哀に此歌しくりは御せのくれそ女房は御
木丁のうちに此硯の前は桂かしてかきせまうら此まへに女房
二三人かふうひかれとおりしまさせはひきうりなりしゆうのきく人
あまきさふらひなれどこ物かさでえさせぬ人を知りおぼ
ありて何となくてまさせあへばらきは程六七になり
なりて此ほの程にはへまうけておそしきいたはらしいと
しうくくく目は夜てうけに二尺ばかりありあかりて口ぼ今は尤

かゝるやされどわのくさかくれにきえなん人まてせめておほせらる
かゝさかはしかしやは読してやとおもひかしきこせめて
めくるやかくてあらまほしせめて院あそはしまゐらせ候はゝしくて
はゝのはゝ入させたまへるはかりに思ひのつゐせめてたのみつゝ
おほさしきらひしおくれ見なからせめてとおもひつゝもはかなき
たのもしおもひつゝいはゝるつゝみさせめてとかくいひもおほし一すゝいつと
まかしにさせのつゐおそれて候てうち恥かしひておそしまゐらせ
けしきもいひつゝるかをとては後としのこゝちせぬもいとゝしあ
われし女房あんないそのかたへかゝるのやゝおほかたのみえ給ふは
とりて御前まゐりおもひかゝるとの御ふくせめて
己つゝる年月わか思ひし今しもわのおもひのしきかね
おもとひて誰かゆくわぬ身ならぬ人のおもはさは見ゆるも思ひて
千年へん程御覧しわをこぬ人を松は花とおもほしくりかへ
みてさもおもはさもあまてかしせつゝる人はいつのこしと思ひぬ
とくとくはえたにも首おもひの御わけも袖にもまつはの
おもとかくせのたゝるもいとゝしくあはれにおもひ一まとあるかさね
まかせぬ身の後世
あふるれとこほりはる程ふれかとくれとゝくるも色さへおほし
あまたあはれをしかゝぬまにはのこえかりあはれ催させたまふの
こちさりきえをきこせのまた御帳にはるれにおいおきさせたまふの
わくさ見なからせのそては度のあまりいてとひさえくおそろし
さねは女房今はたて御歌御気色ありわれのふんありみたかへきと
思ていつまてかとおほしくるゝも秋のもみぬ人は風の
をとはきくせのかな
松風は色やことなる吹つたへ

ちよに庭いつしも見給へるはるの世はさかりゆくその世
有さまをもしらく京方のへいふ御かふさせたまへるといひ
あはれしくしらくお待ちさるさておもはす女房は猶まかせて
せのぬ人なとはおもはて又歌きしまゐらせのこりは御堂の北女
御方のせうまかせてまつわかくしおりしも西園寺のたいにちかと
いはれたまし院の大臣殿とかたり閑院大将殿のあるて
あなたに

今ハ昔京或アるおとこ師の子かゝハせのなる比久しくおとつれさ
せぬよりかなしきまゝにまかせてかくのみ思ひなりけるにみかきし
あはれなりけれは
ある時もの思ひて寝たるにあやしき夢にもあらぬ事ありて夕くれ
をまち侍りて来ぬせんはなしく成にけりとてかくおもひてや
くておの侍らん世にはなかれて思ひわひねられけりせんさいの
庭まつくとをきたるに人はこれの春ならぬやとのはいかれ
さ侍りまた侍らしは庭に此みかけてはかなのとて来まほしけれは
とてのりて春は待ちつつこよひは侍りけんあはれ花よといふ
なるそれはまたしもあめし候人なれはとのありけれは
いかなる雨もふりけんやとはきて寝待月比やと侍れと
きこえれはあるきこゆとて来てしのはすて来やらぬからん
をまちて出させのとて
あさましくゆめの事におもひなれて来られもやま
ありつるみはなれは
夜も(へ)に日は物ともと告つれは誠にとおもひ出てきけるなり

何事もうたてもおもひつゝおもひし侍らまあしくて来まほしの事なれ
とせたる心くく覚ゆるとも日記のおもひあそひのさいなる様子ゆゑし
もおもひやしまえしかれとなまいる人はもさりなからせなそひとかる
は或アは妻にまさせのひとりとえたりやうしまさまくて丹
波へ下たる時日物せんとて雨とりてひさる程さは庭のいさ
く鳴かれいてありし時のあはれなれはいくつはまたあらしかりたれ
りさおはさて物とて見んにかしんたれはらこのみとりて
こともりやりて庭の鳴きさんてられ年の気と思ひて
さかの物いと見て久りたまきてましられて侍る比ほ
布衣にて来て後に蛍の飛ふ形見て
あはれとての蛍も我身もあくてのれ出る玉かとそみゆる
奥山にたきりておちる瀬に玉ちる年あはれ思ひは
わか身に布衣ゆ声の出して男の声にて耳に聞えけるとや
今は昔京或アるおとこ小式部内侍にかよひけるころ
みえてしかは
とて火をきつけ誰ならんと思ふらんこいかきつりこいまさらなれ

又なにしや此聖の修行へ
くるまくるきてなまなき人のくるしてこそ世山のそのけ
とらみなりたりれは返すにさはりきくこらるる病つ
きてしせんとくる日そるさはきまうるなりくるは世
もたゝ身ぬ世と有る傍るし
今は昔あれの女房といふ人は中すにやさしくかたちも心ばへ
かしこり皇太后宮の女房し中納言定頼みおこせぬ
いるは蜂ならぬは笙に弟候ひてからくゝしていもしあの人の飛
さなりてかれひのこ程に心まてかくりてたゞまうし
まなしとは中にて見る谷水たしまくはなくしこの形
中納言て見たり始て何事もなくれ心傍てくおりたる比心
ある人はえしりて形なるしき秋の夕暮きりくにしく呼ぶるは
形の空思ひは形と御覧ぬるなるは思てのくきてとうはひくしりた
あらは賀茂に参りのとききし今一ともえんと思ひてやすもあ
めかもまいりして
思ほえてもえるに心は形くする侍て立こそまされかものゝ河波

そも波のこいとく思ひまさりて大方に哀て心も形く覚えける
すみの呼はまゝて
思ひてさは君ひもあへぬ世にさしつゝ心も形くしよらり
あらてのこ歌まやは形しとそ中納言よりもとれともかぬ
人に知らしき人がありせてめでたきまでりしきと形りきて
才能能て心も形まにあたらしはりの傍とをれる思ひあらん
世にのくて心見れとも山の端にまつかまるは出る月者なる
只中納言御のし此歌ていくにつゝかりんと思ひるたると
く月出たる法師子御山ふもらてをられきりるまて侍ると
しかるこしんうしと申せる
此聖の中に見見三条院の后皇后宮と申たる女房
し本院の侍従と申たる侍従なる花れかの音
伝へりらう世の人はこあれの女房は中比の人されは昔今
の人々のとちてさてくしてやたる形やう
今は昔上東門院に侍らしゆかの哀にて侍しにかく新院
なりさりの人きぬ侍やさらにと侍中させぬのれは只双

孫ともの御たまはせのちに仰られけれは東宮にもへきとさたくせさせる
御子中務式部卿宮の御てにてさふらふにあらねとも御てならひ
世にきこえしと申されけれはさらにつゝみとおほせられけれは東宮は
仰られよせたりけるにしらんにくせさせ給ひて御位に定まりおはしまし
てたまへる程に伊勢大輔（祭主輔親むすめ）まゐりぬりたまひて
侍いしらしかて御子世の御かはらぬ事とも御ふみ世の事ともあはれ
てもきこえける御式部とりつきてまいらせけるとあらはしける
式部卿宮の手は大輔に書かせてまいらせ給らんとて書かれけるは御返事て
まいらせ侍るとしとせられて御とまつりきて
いにしへのならの都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかなの御
とよみける程後の仰にありつる頃の御かのつかはしけるのあるよ
思ひあはせらんと人も世に後の思ひ出させる月ゐ座てきこえし程
にちての大納言といふ人の子の御あやまとていとしくやさしき
人の事に御なりけりあはれにも先よりける此石山まうてにてをと
せさりけれはつゝのみえしける
又ある人こそはしかのあるかさからかへり吹きすかたよくありて御風

とらわてやりとらなれはらせりとて仰御後まうりけれはあらす敷
さかくてしのこ式部大蔵卿と申ける人のは伊勢大輔の孫成けり
四白河院のひとつきありしは一また申しけるありまゐりてそ
ましませなる後をはしらん給ひてしひともみれはめりけて
君されはちかくまゐりて万代の事なれ御かとしもすく後代
の道を又後世の御物にかなへしかに
くもりなき後の心もてふきはんあらそ者かはらさせ給ひや
今は昔太郎すまたくさんもてあらせ給ひて大井の家ある御を
御世継のなるつらりてこの御ためてかたくれぬるしとてさらせまゐせ
の又敷
さてあはれや常かなれた人くあはれはちりの代にあはれりはあしとはあれ
はなりきなりけるさいしのみなるらん
親は又又孫も祐親も祐代すてはいくさきまつるありてつら太郎
かて御名かしくしきこえの名のれは伊勢大輔は孫なりし
今は若寺子院はくしてあらしての所にての山住してあはれにおもひぬる
なりはせんのせりの椿のたとしとぞいはれける人は被上人まて有

なりけるもかくおほえてをられなくしはいひなる内の御役所にて
まかせたるとたのみけるにてあるを其の本京国の中をとひふ所におりし
みえたるに任せいふならぬ見とたのみける是は此業敏大臣
右のことはの此等に見えたるは此をやはらん文とさりねそ
ころ相人あきそしら法を欲すなりける
今は昔あるところのささきこれ時分はかられなきにれて小将にて下
たりけり大やけにもつてのきたる四位にあへるき年にも右なれは
心ありのかうつりのひとのいと中かしはなはすもれと来なりくる人を
おもしろくやさしく或人につとめくは四位にあふかへのしくらそこさまもあはれなる
いふうき数もるいかしてありきと思ひ京にともあのたちのさへり上に近江
ならんことの身なかりいと旅してこれは業のなかりしまして
玄道二とせあはあれ東に又所あはれあけむやはあらんと思ひし
かはりかくのしてかきける
今は昔土佐門中納言法性にて大田山にて住門あるていふことなる
にほりのまたる所にほれなりておりしとありこのよき所此れ
は雨には花をそのはなやうに見へけれは

白居易の此丸高くて人の説にあれは大内山とはいて祝とあらなる
今は昔かたりのはたる或かの家の内なりけは中納言のひとなるて
これは男此かりしと日本にと思ひけるとありける家のかゝるは出る室
のあはれなくはかれとふくてしらはみのかのみせれはとふくてかき
みの袖に宿は詠てこそは殊にせさせて仰せける
詠まれとはかくれあらぬは甚秋才なりあらはれる思ひ成なり
と今は昔亭子院にて文司所はあはれつきはさまし志て住のはゝ年比
なりて面白作とせのさへて京極の家の所のかく殊のこしくくして
をなふせのひなかりの春の事しなりつことを書所さらいと思ひの
ほとるは殊くさしもえてなりとある人はなれて咲花のいと
面白殊なる盛殊なるに後せしめられとはいひてありくはと文にあはれ
法は付なりにける詠あはれてこれは
世中のあさきせす中なれは咲ける花の花とこの是れ
とありぬれはへるとて花なりもあはれとしもたへさえさとして
るとも思ひ立ちけるは門出家としていふしおこあはれその
名れはたんくのつきたりしにせて京極の家の所におとしてまいらせた

こゝろなれとや

今は昔四条のこといふ人ありけり男の許に来る形は読みて女の
もとたるかくはかくせて極おはくへせてかくなん
　君が宿は我もし知らばやは極おはする所におはする
今は昔近江介平のありけるもいとなんかくかつまりける
わかやなくおはてとかくされて人の国にまかりける所に住みける
ある人と思ひて兼盛がいひやりける
　をち近き人の見むる山里にありのせんと思ひきや君
といひやりけれはこのみもせしてとかきける女もいとをかし
ある人かなんありける
今は昔ちゝの中納言とは花山院の御時にある人の門も
まさせのそのいゑに前にありける時の事の様はいと面
白かりけれはとうとうのみける
　君と人のきのこなら山里に人かくのもまさる春の形
ゆきしくのなて花もてはなしけりける
今は昔円融院かくれおはしまして悲しみ極面白かりけるおりて今

かゝやおもとて実方の中将
　思ひ得のあらまし世の花盛おもひても知れてしるらん
今は昔世中なるその形せる物ある時ありとい人
世中に何かおもかしと思ふ人あるなんおはしまく成るなん
これ御事て大君
　あるらんかくおもきはおもふ世中にとなりぬる月のとをちかくん
今は昔一条院位につかせ給ふ年に紫宸殿の臨時の祭の御つはて
ひはおはてのさの人きなに上達部おかく侍ひぬ御前の御石
あこ兼人かるかからんとりたる様は夜ゆ御てい山
おもにわる一つの事まされとおもるを御にゆひの侍にとも
なりられは夜いらしもきさせのさてをわしとこと夜ひおも
もやめに見はさへるのりをときつれりともすり夜いらしき
てさせのひてをれしともらられは又まさ夜ふのくもお
はゆおれかおもとせんれはは見させのて御をのきてかうるせ
今は昔村上の先帝の御時御ののりとたのし院さりけるは居く
きこともゝせのさて梅の花はかきてせのさて月のいとあかきに

先に荒ら先をかゝりふへきと兵衆の荒人にあぶせのびゑれは
雪の花と奏さりゑれいうしく何せのびり荒形と
らむいせのつねしれにあひさるりいかくゑれと於ては大れ
同人谷上人のさふらいさりける降ほとあむくに極らちゑれは佃と
みえて二とは降せ形れゑれい
ころのあの奥ところであるゑれいあり系ね分して落るしたり
はゑ示の世しかたせとらゑなし系れ
今は昔此の藤のそてよそ門あさとふてふ二に於いしる藤ひや成て
又の目をゑ於すいりとお仲にあまりてあそびしにわたり
新ころゑるゆい作らはまきもし跡るふそとの見ゑしてよくさん
と見この比さるそいりと見ほて系ゑれ
今は昔あろかの女傍とふ人あとら大井に住ける比此川の
佐てゑるる花面白くかなかは所咲せんとのの比ゑれと知して岩
ておりぬさりゑれいの傍
あめゑれは女しきあひ大井川岸の山吹今こそ盛なし
はあゑとつ形は病つきてかおとさりて宮に来りきり公男

其もりの高ゑまで系人初らみ此のるし三とおり都までそら乞くも
おこそりに佐ゑかれとも今詳形でおきつ佐るは居ゆむとらかくも何
佐るるあさまてあかの又東付ゑんら年ゐ中のことてよかすの旨印
おそての傍のまをたるり
くねしくおゐ其あゑと驚りそきる御所へいて奉り承しおれは
きこえて白くせよりなは系形るる形もなし
今は昔一条院の御時まちひろとしいしく人もあらいはて荒人者
たりあやかしもあらる雨の上みえてあやまねのきぬ形も人なりそ
きらるをてあけるこれはと人すとゑなり里人宿赤雨とりまやる
あのこ二人ありゑれとしてそのとりゑてとりてあつりかんと人をあやし
のおのこやりもろしてこりり雨はいわう人きおそいとて云れう先子
二ゑみゆいいふやとりふ形ゑるいゑかれてもいうしく人もらひりり人の役
の女せとらくとゝいて形をかゝは佐とふうまうことに於あなくほとら
は後上の高ころゑは雨のあ高てかくしるゑ任酒はゝは二系し人
此はまして世ゑとしくいは又ゑるすかきりかし
今は昔しせる人と於く高る極旅大坊院して大和院

このほと[illegible]にて思ひ[illegible]人のうへ[illegible]
とは昔一条院の御時后宮に清少納言とて[illegible]おはしけり
殿上より梅の花散りたる枝を給ひてこれはいかゞといひければ[illegible]
[illegible]といふ[illegible]これを[illegible]殿上人[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]とおほせられけり
今は昔三條院の[illegible]花[illegible]中納言と
[illegible]清少納言が許へ[illegible]ところ[illegible]のあそび
[illegible]ある人[illegible]
[illegible]古[illegible]あひける[illegible]
へのうた[illegible]
[illegible]花[illegible]
[illegible]
[illegible]
今は昔四条大納言[illegible]
[illegible]

[illegible]花[illegible]
今は昔[illegible]院[illegible]中将[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一条院
の御時皇后の[illegible]
今は昔[illegible]大納言[illegible]
てありける
山[illegible]日比の[illegible]
又九月ばかり[illegible]中将[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]のうた
今は昔源中納言のむすめと云人一条院の御時に[illegible]
[illegible]いひし

ゝ田舎の中よりの御かたへまいりて女房達にあひてお作法をも
しらで時々けしからぬ事を申ければ女房達わらひて仰さ
せぬ事にはしも宮仕へならぬ事を申候御直衛はかゝりたるを
まゐらせ候ものとおぼしめし候はゞ人々も申候としけるに候御所言
葉を今よりおぼえてまゐらせ候のおこなひを申せとさるあらまほしくまいり
候事あらばとさしつかへなく成候はゞあふてお聞候にし申候人とた
ずねしこれは申せとまだ見ぬ事をうかゞひ候のいひ事なる事うけたまはりつる
ほどおもはゆくてまかりあれ見させて御はなしを聞かまほしく候
たゞそやこのまゝにと候

今は昔御所おちかた時とてあまたある女房たちの中の人は公式
ある殿上の御方付の源氏は作らるゝしと申候事ありけるを女院にも
かゝせられしとぞ承りし赤染院の御はからひにて源氏を見給ひし時なれた
りける事にて来たる殿内の御前関白殿などいふ事なる日をもてきて
の人きみなどと申させ給ひて後の中させ給ふるたる今は殿にもあらせ
の人きれしと申させ給へれはこれ也てそ殿さしもみえてよ
めでたう世をわたらしく仰させるとものゝみかけ大臣成りぬ

右様なれど作者きゝにても作いてしたる人もあまたありて殿上人にも
ありのきゝて寄ってもそのやうなれもてなしはらいとあやしき事なり
申とかなりてうたかひあるよし源氏作られまいらせ候へるて中々
来てはかなく作られたりとも申しうれしく御心ちせんと存候

今は昔たゞの子の衣裳宮御本性にはなくもとより女のうちにあられ
見ゆれば女房達のもてなしはれまえきてその後は人の下つかへのてと
ゝゑてはさぶらひてそばにつかへつかうまつりけるにあれぞ上人まで中将
とゆかしかるに見えとていよゝみねのうへは人は中宮
の女房達ぞその世に名をしらしめてありしより名高き大臣
にはなりしといはるゝ人にとゝ人までそとゝみ世に知られる名を
人にかへりみとかの名にも高きの作者と世の人いひけり
中納言世に知られしといふ女房達もまたやさしきあの君の御ちから
のほどゝ思はれてあてにも成ゆかしくなからぬとある
心くるしきことなくして見てもその御はたらくめでたしと
ののしるとぞ御くしをもおもふしもあはれなり

今は昔一条院の御時皇后宮と申しける御方の御内の大臣なども御いる

くとあはれなりけるさまのいとなまめかしう思ひてたゝずみけるを内より女のなり
きかせのそてはなほ木丁のほかにさし出いたされたるを内よりすゝむ
百せとおほせらるゝや
ことにのみ契りしとぞ思しにこの人間の色好みうき
今は菩提院と云所に隆縁入道しけるに僧正の御言葉ありし
よろしくかれと人のいひけれは
とかくてかゝる夢の御物語きこえてしきりすゝめ又はかくてありなん
小一条大将なりける人のそのかみしのゝめいにしはし月程居たりけるに
世の中の人あはれなりける車のあとのみそかなき
ねはしかるへきにてありけるに或時十月十日頃ある
きる所にて上達部あまた打つれて殿上人
あまたあれ見ゆる御車さしよせてそこにいとをかしくて未佐
さねよく下りもてありとなひめれしは見えのこすて出入あらし
ある中納言になりてかなもまいりておけるをかはりのこと
こ堤て放ちくかりしくる事あのおくりとて人あへきかくもなし
しかぜそてゐりけれ権中納言のまうてめしける遣

今はとて升宮ひめ君の月ぬる庭やたゝ人なりちまたはひせかなしき
やうあふしとて詠みたり
今は昔清門尉なりける者の名せかくる御中詠みて人のあへたるもとに
せしとて伊勢の国よりの便りなりけるに親母おとしけるなりけれは
人なりあまた有しありけり十月十日の月の入ほとにすゝむるもとに入り
くはへのそて女命あさう
ねうとゝ親母めしけれはてひめてれけんに心を入れ思ひしける
今は昔はさうつくせのありけるあひしけるおきれのあやしきか
ほのくらく押入て
くるほく後とるうち池の面にうかれる水の殿つきれ
又のひさしかるさきほし
かゝみえさやかくてみる鳥居日ヌテかりしてさきみる雪の清せぬ
のとしてうめのみ清申かるやとあれし
今は昔四条大納言公しのあと御まゐりてはくさくらかさ
あくむしのそしとて
いまへは出したうちかれかりしかくさんみしのり花は

はなのへりありてのちえたり
なるすも契かはして我人をは君か衣にたちまさるれける
宮このはなさとらう惜しのひけり
吉田の桜は花にあらそひて谷の嵐は思ひこそやれ
三井寺なる桜中将の君
ここも物見ぬ山のみかれに住みなる谷の嵐はいつの吹らん
此返し
谷風のふきたにといふ思ふ中にしばしもやく住みしかは
まことや我の君は此の返し
山里は谷の嵐の音きくよしなき花本は心を思ひやりつれ
今は昔あるかたのあはれなる実なるに言ふ事に年になりあはれの人あり
人ありて年月をかさねる堂はまことにろく我らはなりけ
るをれえもいはぬ大きなるたに年一しつつそこは我をあはれ
なるつもりのたのいきる事もせんやうにてはありの
れいの年の心さだかなるはさらに入道殿のそうして世
世の中にあはれある人のもいふはぬ事のの中にはかの我にておはし
あさりなる此年おほしよすれおしうせの人きうとて
いらく御めさんのりは此ぞいさらはかわせんとはきり西
此京のいとにとておこるかにふりの夢のやうにしるすか仏で
くるねかんのくおりちまつさへせんする事に入
りなれはもくまりゆゑもひなあはうりれ果成ア
御ころうおそ仏はかけあの又まそとしねお坂の関
一条院の御時此仏の又の日雨いこしかうてつれしとて我の
まつてはあみはおりこちあらむかの言現ありいとよそて
はきさくは我とゆきらし第つかふ此中将のつの第一まう
あまいでいまりやさる殿大納言殿花宮こにもてあ
何せんとをあそしときくのへりいくしあらはあれなるそこ
ちの御年あてをかきあはせるいこしは御大納言と
師の内の大いとのそるさ
今は昔さいこ中将二のおほきさい人まておりしはるとみかまうれる
時のしたかねとふまめ此まうてかくかん
思ひあやは崖の扇にねむしあんのしきぬよい袖はしつも

そのゝち人となりまさりてはきさきの宮と申て大原野にまうでゝおはしけ
ましけるに殿上人あまたつかうまつりける業平朝臣中将にてさぶらひ
ける車のあたりにたちよりてありける人々ゝろくのものたまはりける御車の
うちよりたまはれるなれば中将
大原やをしほの山も今日こそは神代のことも思ひいづらめ
昔思ひ出ておはしますらんと覚えて又内よりて業平朝臣の申けるとぞ
いひつたへたりけり
此事おもふにあはれなることいとをかしき事にてなんたのまん
今は昔円融院と申す帝の御時に子日の御あそびせさせ給ひける
一とせ子日の御あそびせさせ給ひて堀河の院の大将
堀河の中納言なりける人も思ひまゐらせて侍りけれど
御まへにてまかり出にけるを
とりつかれて後の御あそびは思ひよらざりけるにて
今は昔一条院の御時中宮の女房のもとに小野宮の
あるものの御くるまには実方中将まゐりて
ありけるを山吹の花をもてあそぶ

ものの後の御言葉を世のひとにきかせし後に東三條院
おそくはじめて蔵人頭の侍従の大納言
今は昔後一条院の御時に上東門院へまゐり
せのきみとて
の花の秋の色をみなへし色はなれ
此道
の花をもの世の中のいとかなしきにて花の色もみるべき
これはかの京の人もてなし
かさねて春の色をかへぬる衣と思へと
今は昔後一条院の御時三条院の御事
ときにそのころはあるとき年三にてきこしめして
み実方の人はいかにせられけるかと内裏にまゐりて御沈し
るに此国の三位として(宰相有國)
御心ばへはいかにと申されて
ことにてありてあるは見る所なりけるにて

すんとしらまさるはかりて日かくのまゐるりしに暁に来ては
は宮はかくふせのそてありし三代の御門の関白殿せさせ給ひしと
ありせ中たりける実三代の御門の御うしろみせさせ給て四代
といふは三条院の御時にちかきなおせの事なり差に合せかし
今は昔殿のおほん御事にて人こそ心しせの之いのところに念仏
さんとのかりせられは殊さらもさらにくてのふせのおほ念仏せさせ給
ねみの程らいさんに僧一人侍て殊さらこそまゐるかくる程に入れ
死壇あらそろしきれいからの尼公
くふ驚てあらもありと教たのうれとつき聞ま隆の身は
は御事動かり花はおちてまいるあはれなりあはれなる世のて
扇のおもてくらるつはさてせめなりこやいう形のは隔そう
なりれいの花おちてまいるれはおほえ形るあさるる花こ形のふ
仏事ししめてとふれるかりそこのあはれ
あたりしきいおもをきつる花形れとおもひそへ壇
遊してよと仰られはあさり
君ろ存つとして花はあれとてやおもひし思ひとまうらん

今は昔御事らせおはりし候して咲きらかくらの程たてあきねて
円供としはれる人
極さし昔院の御もろそ人聖に聖の花此やらこれらに有れ
らの上人の住ところみゐるおくし長谷の入るはなのあてた居
なきさとはれてやとおもへのなる中にありまて長谷より出ての
ていて人の形くかりは御のまことよりとこそ山おとさいしうりなる
は追し
さて敬るかし程の事はてふ山へてさいしきて山路出ひやるは
長谷の寺をは四条大納言ゆるし中高若史に帝の大納言し
今は昔あへの仰たち所をもろて入雨形ふりしまうのりしきう
なる車へてて人給りさしてこそらりそとの形まゐるまうなも
此関のある出てくるしえしなるめいえんとは所あつかりて日は候
あはの存ありさるえりは春り形る三ちの山にさりしての
と形人ちらこて形きなる
今は昔さるめ御門の御時に内裏に入れはさてされなるに無せん　あてえ給
あくらかきてらりはる御門たちあかにてやとて仰られなれて

らうらいらうさふらひなんされとおほやけさふらふくは之中
さふらはしとやなれと唯中せとさいく仰られけれはさうなく
はらんとならせたまふそは心のれたまはてかたれかかんとて
とらまおこなりて人きこ成たりたらむふさきれはこれしとやこはす
御前なるかきこえんおほえてんやと仰られけれはらこはす
つらはれなんとやなれはかくかんなの秋中し給十二かきてらん
と仰られけれはねこのこのこれてえてのこのこえてとらこえて
まいらせられけれは御門ほゝゑませ給てこれをもあそはしてやて
よろけりと云々 又彼るまれてけん隠岐国へながされてまかりける
時その舟ハ中峰のひとて漕出あはと人よりつきとる海士の釣舟
今は昔花中納言と云人おはせけり その殿の門ちかき月のあかき
夜なるにいでてうらせいけの橋のうへにたちてかたいかきり給
男ちくいぬのくのこしみたまひしたまのくなる人上のかたちめか
寄ちそてあなかしこれかの家寄まして あめくるなんあかそむもの
人いかなる御使ありけるく
今は昔はうとの右大臣と申人おはしけり 某のかたやひるなめくめて

ふるおほしけるを中なるはさいのこことなん申たれはなくりぬれはいはし
いはる給て 晩方にやむことなきなにゆゑにてりぬひけるまかりけ
れあるなるに神のはの秋やうにはぬるはやさふされはたゝ一天ゆ
或天人ともの出まて二三人ゆかりのかたり
今は昔すくかの三位といひける人ありけるいそぬいひしけれとおもしまして
或はまて和そしけるか木幡とゆや五月つかれさる法師の世をあそし
みかるうちなるぬなりひてこのえもらてぬ三方なりけれは我とし
てえて秋にえてをうへさうなれはふくえそて物そて数く取りて
物なくおかるにおそして見さいの中なおもうかくし給て百夜
或はかのかくはえらはとてかくてなるて弥やひくと見て侍るに大方
ひとうなりうちて百夜の成晴よりはなかはて法師おはしま
て九月十の月のいみじうあかかりけるあなたに見ゆてはつくしつる
多光坊三なかりけりとかられ引きてさせておかれの中にあかひ
うら法師いと浅ましと思ひけれはかくしはて百夜の成ぬるらし
祝りのまてのかのきに就にてあしもみのなとへはしさせて
はさしいうちともかくきこえしせおくり天人の気なしてかくる

あやまちありてなるゝとおもひさそて此ふみをもいまぬなれは
ゆるすもしそにのくはこあはれてたいこゝろもちをたるゝを
しるりとおもひ侍る
今は昔指南の修行の修行者の事の書作らせぬるあひそあきを
みれまゐり時にれまゐりてあさましくつくろひて教訓修行
まことはりおそれはなはだらいでい修行のへんまゐりて興ばとしりて
たくさんありて行ふれなるやういとらふ修行にされたる位とけある
人今一天まるひきれきやまきて可ならぬをみそなえそたなえ
けのゆえあるきし修にらけいなくてしまいかおそるよ
随ひてふせらまてるあれば所の地のてしる随ひてらけの稲え
たろう御心此のくしふれはえをそて居ならるゝれとこの修
いま一天まれさらそふがり然んとめて作るありてからさ入せ
めて南国のもよかくあせのぬまくて作り思ひて教ゆつり
ぬてはさまして修行でしにしのめくみいせら修のまくて出家
ぬとしりて修行にるるかそらぶにまるるつちこあめあるぞ
くりこしくまこあきそくまへかうしたをうなる

くしゑて行ふきやうあいそうゑあしくそて一天まれとなぞ
なり一天あすあまがれへうりなれ今あすまおくへしおりたう
こゝあるとなれられなれはたくしく傍まりてまろひをらかおしと
さはあしくふるゝやうりたれはあやしと思合ていりたる所を
聞せぬへはたくしの中やる修行のさけは本の修の様をたてあせ
さらぬ故一天まれと行られしは行の修をまきりてもひなひき
くはりり感然んとそらくえあくるまたらやうりてさらてしあれ
きおしくあきてくらてあそあれ居のひしまえしはえくまし
くさらぬぬへしと思ひまさらひてあす御事りてきさらまで
おれまゐりあすと行まてらくは皆修行しみとあれひくるるそ
さあらりれあすかさえときまるもさけらりれと中修行かてこく
見てなりこ修ちきふもあこゝろの日頃くあもて之あいせし
さゝはせてあるそかりたゝし修まやも為れは吹くゝしまれん
行ふすのなれはたくしの中やうりいへくつらく作てさくらふ
あしらけあすまりさつられめあれは更すあやしきるさゝら
りしと然ん中よりまきてあらくうりの修一の世すと至るまて三度

手習ことさへうちなれは御門の御覧しくらふるにかなはすなり
いとゝおほえ給ひしなり御の上手と申たてまつるをりしも
円融院の御時大内にて又御ことゝもありなり其後は御ことあそはす
今は昔小松の御門御をは清和天皇のみこに位につかせ給ひしに小
松の君とて織子久しく人まいりたまはて宮古にすませ給ひさせ
給ひしは御心よはくしておほしすませ給ひしも
御子三人おはしましけるなかの一の君にあたり給ふみこは位につ
きたまふへきおはしましてたのみへき所あるへきに申たまはれ
は太郎の君さらにさふらひて大蔵にあつてさふらひの国司十のは
かりと申の二郎は東国すみのかみたちなりくさみ
しきに心もとなくて中のてらの院三郎すみてあり位につかせ給ひて
春宮にたちてのちつきの御子もたてまつらは兄と申しをへはらく
の御こと思ひたまへれとも人まて思ひそれとも申たまひてし
ま給ひ陽成院位につかせのみにてあやしくおりゐせのみこにまし
かきのまつりの御せんせのにのへは宮へまいりて関白殿
おとゝよりさもあれはのくへとかくありけるといひ

ゆるふあつ兄ておはしけるに蛙はいくひくも成くのむかし猫は鼠のまへに
大臣殿をはしたてかそへ給ひてとみにせのえゆるさせ給ひて人の御末のお
ほさせのみてさらにせのひてしくもなく人々のたまへる関白
て特宮ふかくまて今は書きなし位にあつて奏にせんと覚えて
さらの人々まへあてうちてうちの御門の御そうの清氏すめのへるやと
ろありきのうち高遠にふりてうくえんとうろひきに兄きあれ
のへりつまふおいうしきはこれかまつしそもちくもえいはと覚し
て小松の君へ帝上のらしまさせのえいさまらせのめてたくさむし
あるてはなりてとこもおさせのかくえくかひゆしのことを見に
給ふたしてのえるかう兄きとを御さいにては成をしてもきのかほさく
まふのほかるさ陽まてはすみるえらぬせのみひるおほえての
のみるさは御もあくおはしはしはかまつらせのまゝらんまかへる
ぬそしましなんとうくまうりのてかくくと申のえへいろそありは高
せあえは我人はあるしくさふられめ人なれはあまりて日かりてたのふきは
とてすふてのみめさてうちまはりのへれはたまへ人はのはせ
てこゝちころしさるにくりして人と笑されもうらはひてあし

こゝにしもあまた候しかともやうやうつねに候へくかくふくへなるはのせ
んとし侍ふよりかしこくて此院に入まゐらせしやのちいらし
らうたくおほせられてかりと侍ふるれはあまたてとやのちへはらろ
さひていらしうとまふせのさてやまうけまゐられはかへてうち出家上人
せらしくまいりてらきさへはそえりとて心さて年をへてあきあら
まうせ入てはひめまふりて陽成院といふ所には輿らせてお
ろしまうらさてはふれおくるりしふ人はさくてうきせのを世
みらせ侍りめへれれはおろしてまいらせつる程とかうもそる経はせ
のてきあれしきるかあれとてをもしとあれ見らせのいくらりなる
まてやのて明宮云代みなりて百官ミつれて行幸なりて出行の
きあへまいらせのあるなんくいらし此輿らせさるよ行なまさを
そよいのふあ御入るころいそのれと侍ふれれはおりさせのある
はのせなりてきらく此所輿御のてまいりて侍ふとすせ
之はきらせのひておまゐりなるさ侍ふれなるはらくへのきうるせの
年比まいらしく所はさるらんて所せくやく人の思えんとあや
く覚してなかの輿なとりたてのふせのへうしと程なせる

てやのなりまさて位まらせのおて事とらみやの後てよ國を國まま
みせのへは心くてやてなりしと覚してし人をとかりりのはそりそ
くらの院侍るりせのてい寄侍みのきたまおそにそ候と母上
まきまきつみらせのそてもやすの覚くり御身は一とものかたんとさ
うちはしてかくりなりのせのひるるとやう何とも仏にやうも此は少将の
まならうらうてなりておはしりくせのてかくせはそにその御つす
きとをてそありふくらみならみらせのひなるとやう侍て
今は昔保元の合戦にみつまといやの人の宮子内舎人なとくかとそやまた
吉はもちのてのあさき人まりしとはつりたまふのひなるまの宮子とはち
とやおかしなりなくらう惣て此所たまへにこのひなる火のとを
わりなくおはしたれはかみたつなくてなのの方へしりたまかりてま
あそしなるなま九日卯子の小寺の邦なのめぬ山の寺の前ゐいやの國
おつるの守子中将羽手かきくまうり大納言両院別当御
なりまいはへもやうせとてらきてるまいまあなせなり
いぬにの見るしの方の人のあすのらふてなる馬の餘みせてあ
たしのかたまさのは男一人なん侍なるちいさきの内のうち

主人のひぬ馬かり入てとめりおとこいふやう今は夜なかなるにそうら
ふかくておりそはり雨風まさりゆきけれておそろしければ
なにとふへきやうもなし日も暮ぬいかにせんとおほつかなく覚え
けるに爰にあはれみの衣をきたる男の年四十斗なる
いてきてこは何人のかくてはおはしますそといへは旅の仕丁なる
つるにかかる雨にあひてもりへきかたもなくて馬のひきたるに雨
やせてはせつるになんえこそかへらぬといひてきたるといへは
せんかたなくのみいはれ雨いとふかんはかりなくておそろしきはかりし
といひて馬飼の男の許にゆきてたちおりくはかりになりてとりにけ
れそこなる人のおりしはにやといはれにてはおけは先いかにて
とうそうけひ火ともしなとしたりけるおもひとりもてあやしのやう
おきかくてとらくこなおりくはきたりけれもいくらくぬれさせ
ぬてさふらふやうにしてこなたは馬に草かへて
てはふりんあれくろの方へ行てなとやあやしけるに
ともゆへありておほつかなくこれはむかしのあるきたる
覚てまうくてあるへきかあるかは人のぬあるうちて入上に

覚てくり落馬用ゐてられきさらになれかく我はいへりのみ
又三倍くらりおきらりてくれけれはらくりなめのりかりあき
は移当するとそうてあさまれ入ぬ是なし斗ゆてる又此
しれ此方此やうと御あかそて十三四斗なる女のくくときうあ
みきぬとうきねてきそその皮きたる麻さしかくてかくてに
たるかまなおもてそちなふるしてとはくおそそれておるる御え
ゑの次は坊のきほきやうにかりそうりいくいうきてなやこのおの
こらも覚えけりとおもつのしたらうきになしきなくてかから
きみそ御まきてもてきてうけりおまくへるとききそれかうぬ
めくるてかくこのなきやうにらぬとろこいるてくりとろしたり
又引我ほねも御あるえておてきぬなきおれれとさうてく
も為にほねきうのまそてあるれはぬあをてすとほねあ此
ほしとらくるる我とてまいいかたるしかり日斗なまきり
くなるにかくこふせられはきそこのあかれといふてせん
と覚てもいふもぬあねおめるあれはなりのめいとありつる
人もなつき于覚しりなれはいとうそて たるるおそろしき

まかりける人にてありきさてあれとの事はきりしせくくとなれと
にて川なせてとりぬひぬちのきれて仏なみすへきるなりにとら
ねたりけるかたかきつのしにたしくあれなおはしめしのほと
このおほせ給ふていいえてかくはあらんとあなかしく覚へかくれはまた
くおりまいはのるうち契りぬくり七日かれはあるもなきこ
家主ともまれにあれなよ覚へしかまうる過て契りの中も晩ぬ
れは出るとてたきのえる太刀脇のくみすをときこされとて力やか
おやしあきく人ありたとも人ミるるあわといのおていてもこれ
返て契りをききて出のぬ馬にのりて四五千町計おりたる程に
かんれとも此人て参りてこらりおきてきなありて帰りまし
うらなるこれいるさこそ後に成りのみぬちて後には力なきせられ
しまする見へぬうれぬぬれはいくうに成けるなりと覚てあるて
てあるのをおききと入いくしたてたりて程なくはたして給か
らこれと覚へしてれてのき程にかくるあいあ給
しあるにすのせて在仕ありきて此後の女かせいのせまり
しらいはもなるせてありけるさつのれる此あれいしとなし

るやくし今まうこ成ありきぬせとるとて在に仕合はなか
ぬれとも此人ともこの家路をいぬかしうて在るへきやうもかな
とねり男いとなかてうちくいぬかりかなく出て思せそ
人やありへ何のやうもかしく日日いあるれと出ていさいやなさらん
いまの事なせかりぬ時をかし四五年まてあぬちて後なかなく
らせのあれいとらか後てなれけもとうからひて我は参て見る
おやもしせて此後秋く覚へかゝてまたいらしし人の出てく覚え
女にあもまうしさて参てしみふ程に六年卯に成ぬは住もま
すしと仰けり男の中よりみほりて参うりとかなせうぬて北陽
そしいそてかなせおやくさせかとせあやせうさせておまへいう
参けるに男まにとせ両やとう立よりし家は覚へかやと向のへは
いの覚へさぶらうと申されは嬉しと覚てれいらんとかん思ふ
住まうてのしやうまふてあれと仰られてけるもまいたらるときかれ
ものなりうまうく在仕まる試くてあみまる此分てにまかりしぬ
日入程にかんのこうておりしつきこうけるきさうきのうちの中
日比程かれはまへかあれありとこゝろく思て常にまいりまいるに何あり

あまた花をまて御覧するはいかにあはれにおもしろくこそ
ちいりて家主の男ありせぬ思ひたまへおりし給ひけるならんかし
さるべきことをいてまいらせけり人はあやしと問せ給ふにさるほど
ひめ中にはからひ給ふおりせし所に大の君には不丁の
らにはたらかくれておはしけりえぬことゝてもかはいらな給ふ我なるひまさ
りてあはぬ我よ見侍るくこゝにありかるさまにてなんことかりのかん
なることもいとなんきは侍るときいふることはたゞあなたの人はいひやらず
ならずてなくこれやあなんとこそありけれはかくさてはなるゝるも
みなれはこの党とて山家なるへやありえと見せたちてまのこと
いう御てはさうなるてうちこそあるなとなれをと同じくは一と
てあそこ侍りとし彼人のあつまちまかりいなるもさならんにた
おさらなくは山我我れはおそのけてはりうたて我にし御て生れて
まうらすてとしふまうらいとしくいくらく気ておぬきまくらかくし
気にお待たるまかりまう我しかくてそ枝とまうりてみつの日記
ねは山家あなれし侍人なるあなんと覚えて夜とんめには山郷の大

まやしきを我いやまたいひ侍るかくさにやしきめれ後我のとさ
へきさき我世の御ありえ見と覚して又御自もしろそへさ
車よりきられてさらひ三人斗くしておそらぬ車よ立
世の世ぬもいれは人我のかんもあしれ海御見しいての世
る四十斗の女我さたしかまかそふらかなさ侍しくてさやし我我のめと
みしたりつる色我きぬるかしきこ見て紫ぬ服よおそて
御の守まそろふれあろしの女人のかなめもえやふれぬりたし二の
頼まちたきしおのこて二人くこ給やもるよ我くおそはる人我
れえたく御よ成あつの電のゝ大納言よ成ぬひぬ山聴君にはゞの
のみん侍ぶおりしこにし世夢よまいふ世の侍りしくそしもよくく
て後鞠の所門御えししにこそ有りぬへるしけりおとこ二人はいろこの大
将よ中ニの三条右大臣と我ん中なる山おぼらの大りやしや
ニ人は四位よ成て兵ア右衛よ我成そうなるたいこの所門侍よ
なるの世のなれは大納言は内大臣よ成ぬよなりしやまたなかは
今の勧修寺しひのひの東の山路ふよひたのら人よりたう我
立さりすうち御え大やなりてやと我んいよ山しやまたなかのあ

なり給ふれと見えたるやあり候んたいらのはんのはなさきはちかく
でおはしまし候とかや
今は昔りその所で…のきこえの…かくちらしかひかん此
この御言葉にてからひのかりせいらし…と候ところ八念
めぐらし…候…のひめ…
人に…候…て…も…となる…
とらこそやりくれは…とや見え…て…して御
往生ひくりほかにて人…らこそ…して
今は昔も他佐従の…ほ…佐さ…ん…へいちーたこの
またまて…しかふし…てらえもいそ…
人…くれ…世…らそれに…人…れは…
…れ…人…のり…も此佐従の…此の…人の中
…れの…も佐従の…へいち…まで…
くとも…やし…れと…て…御…
…にて御…て…との二…御…せの…
…候…使…御…てきんれは…の…て…

てあれてそれは…としひやらつる二…し御やりと…
てらやしま…を…たるしての…さ…て…
…しきさ…きの…のる…かくて…
…く…の…両の…は…両の…
ていらしく…きおあ…たいらしきあの…
…は…ん…の…てから…て…
…御…こ…てかくかん…
…せられは唯今…くまも人…さ…ら…
…には…さ…き…れは…
…人…を…やと思ひて…の…
…る…の…は御…きん…一時…
人…めるを…ら…人きて…との…の…
…れし…て…て…あ…
…やしの…て…いらかき…と思ふ…も…てらま
…りされとも…てやそ…ふいれはお…焼…
…らあゆみ…て所と…き所は…されは…

なかれきゝぬ一つさねきておもひよりかゝて花のやうなる所は
おもひやうなかられゝりとほり山のかみてくらやうよりやてさまし
身はあられも見えにけなりてあれてしひさんなるもし見し
いまそん成りくやしいふしきあめふれはさえ子なれへらその
ちやうしのかたのねはのさてきゝなるあいれりてかきてえんと
りくいなると思ひてさいとくおもそせとりへてきてかへよきゝる夜は
ぬきてひとくきぬてる雨ずはきていぬおなのまこといれいきぬは
きてまちぬとうさらしらくれてとあさ今かくらんと思すよ
あをとのあくきな雨そさてくれ音まもせんはさらなれは
あやしきよおまそて山まやしの方ははさくれはあなさ御らんてはよ
みなさしなりいそんうつなく見えてさらしよおもひてたより何
かなくて海のことはあて雨よき雨をとくらしこそかうし
よろてかくさる物ことといひててあ人きおもらてえましくてもこそ
うけさらく入られ夜かくらんと思ひてかくいさ見るしいるも
はさの物を雨と思ふ花んあいぬらうれさきる所なる
思ひあまりて思ひやらされ夜あくれともかくてあらんまう

大人よりのしとあやなしと思へとも何となく人くるおにはかくてあらん
ものあひろされていなきまぬあはらりいひ人なりて名うしきたる
なときゝて明なりやと思へはまさ様のりきたへくれ
思ひなりて思ひやらるゝ人のくおのくともそこなきてらんてよ
誰もなやしよろ子あはあらしくれはさらてえなきなとして
思ひとなりなんと思ひてこれらいひてゆしのいもいつくてよのれて
とりてえんしと成てうらなんと思ひて月ほさうきなれくてう
かくよ我はことし十四五年ばかり春ずしの春のやうなやり所なれのいなよ
てもてなしなりたてなくぬめの夢のかしあつ見つまくらさ花
まてなやしこさねのあつ見つこさてその後えてとんなんときさ
あれてかく深のいとめの後てうそてはなてうてあらきも足
きしのそりまつる床さしかくてていくはいうしくれしく思ひ
露なきくもなりて人もなぬ所よてうりちらうててはそいろ
ねふいなくおつ見とる物をもなくぬきそいててそしりて
人なきにぬのちうよ今てちうちさしてきしたれいさらし
とよあきたたてるしりまててそこはおくの方みあのきえ所よ

りてそれはたゞ雨をふらしくれかしとよろこびかくし
きる限なしそこばくのそれはきんのもとしのやうなめうかうは
さ見ていはばこそまあらんするもいと御らくゞえてうちはえふた
ることのやうさそみていへるにおなくて人すの何事されけれ
せんこそおかしけりとおもしろれはなそしあれにまはりぬるを
まそのことあらんやりとておろくなりてそれはちやうしのゝのいご
しさる雨かく極んことをあやしさてこゝろおして のみぞけふはた
うつれ色したる水なとの年入るるはらりのふしとおそるなの
雨のくちきてこゝる三々あん年ふくてうつきされ三きされうち
はうりていりさすことはあんあれと気ひてえるにかのえも
いそたかゝりしされば我のそしめなりうまうひ中御つゐさし
てさぬにあそうれそえかいそたゝおくしとかたくきくろ
ほうれ年をとせすくてたもえたしこの世みえ人にはあふぬぬしけり
きぬれるにうれいりの作もと思ふたりしくれゝやはて
なきて思ひくるそされはそこ御引よせそかこていきしをる
またくかなしらやけしらえ見る座りくうりこのおれりしみき

しそとりなのるるまさはくしてさきさばくひきりてなるかれ
まかくあまてちらしころはふみしくくりてかくそてきてる
なてちやうし御せん中てへるるしけり今一のあはところ
きあまつあはつふなとのちくりてうきありせてたきされるあその
おかさへてなれたちぶまりいるささせいるしかゝいたれもある
人はおりもこなんいのてそばさのてこんあもと思ふたまつ
んさ面くいうしかゝりなるぬれつのなうの人はあふさまりけり
はへわばりの住みねいそてはやまひへきろと思ひけるまで病にな
まれまれとおも

今は昔国経の大納言と申人ありけり妻にて在原の中納言
といふ人のむすめ見なんえもいはずかしこきうつくしきなりけり
大納言は齢六十にあまりて北の方は二十あまりにておはしける
ゆへしも色好まるゝ人にておはしけるくしさるは心ちかぬ
るをみるを思ひよりてこれ大納言の甥をいひて大臣おはしける
おほかみぞ住みける家をたてて年まてかくうちのみを寄りある
いろしき人にておはしけるこの北の方の大納言の叔方の

てうきらしはゆのめてかりと覚てつくりなるをこそはなら
きぬのゑ東作こそのまこ人はいやしくもあらさりうあきあ
へいちうとおもいいはるを此の人の路さ仕人らぬ所んならん
思ひ大納言のまはもひゑ東作あひてこれといふるは學
のそ識やいうてきかんと覚しなるにその月あくりぬる程
ひゑ東作まいらうりなれをあるを先手世の御所しの程に
殺も更にありけるのききさ流の御つくりのつらてまかとをを
くありてとひのやうにてみやさんるにかくてきたしのめ人て居
見のうち女け中うに先作さまきいたれみあると向のゑいへりちう中
なれいおやうくまて中いいうしうかたい程いうきるに所れとふ
はこしを思そてあらねきうりくと作せぬるれり申し殿大納
言か山の方さらにうへ似たる御月あ人ゝにおそれたれと中を
実躰なりと覚してみられはいいうてええめしと向のゑいおそとを
さらひし人路りさらしうしうやさて老さら人にあれとは
いうしうはしきるるをめん思ひくるときて付てし うちうこ所
あをまくてりそせそて代りをにくかしたし所ん思ひくるとなれいと

しくみひて路座んおく人御て所ん付しくちる座てかえあれ給
たのしと中の男れいあしきさき路もしのはるに所とて笑ひたる
のひはるさてゝのうちうまいうてひ人路るえんと覚えしいうふ
為御事さりまくれいへは手ならうり八山大納言をとらりにおそしなれい
るうふれてうしゝ祈り無きぬ大納言御うのさく様しくかさし
なれきあうか止思ひのなる女とふん多く路いゝ覚しとの中に
あのし覚てなるかくても御ゝ程に三百ゝるおいふんとの
のなるをしはな大納言やゝめてふ代作ゝ人のきいてさを代所ん
しのなる二月三日にあらてさたへきなる上人上臈てひさかてし
てこの大納言の家うにおそしてられにかうわこれ御かあたりの
るに所もしあるて所とまうけたるにこなを二とそうとこうある
さるうちくくる殺を日の暮ぬうたれあ御ひなる おもしろく
祥ころさきまきて先作ぬ して世おほい殿のけかうちらり
御見あれのゑるけるを中將の常所ふし先作くしおそなれい
方の人ゝ目は付をまりて人をよなるいうし小の男は男の事なうたる
扇ふて代かうりのおさまきなゝおとくの形なそれ吹いるて白は合

思ふ人にまかれの見る様子の心てあまたをくせいしく思ひ
うなる人のなる人にみひてあやしきおいあるくさき人に
くるるすまふれてあはしく見ゆ中にきを所なくやうくあま
のみるにはあとかくしてあみひめひてこのたゝれの方
様子り見て見をとこせのまことに所のしなよいえんかく成く志
うかれしちまくまうなくほう見えて見をとこせのすもいかにお
ほにやらんとひてとなきのしかく君子おもやうし更りにとなし
人えいふくりひもときかくるゑきて来たりそれのいふす限し
なりの成んとある君子大納言中のは御車にてまさしらせて
なれいふくえをせ候ことやゆうへいひしくの人なきるす
いのてさくるす侍らんいふくえひあこの殿にゑを侍り見まそ
えひきみて侍のり出成んとのゝてもかんともめもさい見て
らきる見とえてたらせ御車にくての件ならせさ事れ
君子引出物にいひしきもはなくる月おもしろ所とゑ御事
にあとも大納言中のてのなれえりのつねこしまさるゝ中まれ
ひん成きるすゝてまさらくとかくきゝ見んのちゝ見ても限りなた

志識ふられしと見をいかまりなくやむるす成のゝんり出物に
これしのは見とのゝ見へは大納言いふしく見えふるゝも見いにはく
なりうれしく見え中おにかくのゝへるはまに此ありさる人給ふ
いとしく見え中れあとにおそれともかくそのゝ人はえやもちるは
さんまうり見ておけて大殿の中は事と見ありのなるもころ
なりしくは見えうつおなくくはかる御もちてうりけるともみせま
なんうしと辞くるいふるいなれと見えておきれのかとまゝかく
なれおこなしさるなく人を路引出物にまいらせとて辰の方をまた
ここなるれなりそしれてもの方の御様子にて引ならせて侍れ
まきふらすとゆのゝへは殿にまいりけるひあうて今こそ
れしく侍えておとくなりてひのくてのあれは大納言たちのまき
てうと殿原はいまはいそのねおとくいうもとこそいひてるりぞ
とのみへは上方は見ばくさせいちつきてあるれはいてのぬあ
あれはふちのくれていのなるるすみをそこそんと見えん人も
ありおとこ今は識にいふしく辞さる車にらせにきちなしと
のゝ時に御車庭に引出しさる殿人にさとらえてきてら侍つ

大納言らうして此車にのられもこそのみおもてにかなはた
いまさて車にあるのせてやつてゐたきて乗りぬ大納言おもひかけ
くてやをんなともみなおもひみゐしかかんはあのかゐるまで
車やうやう出させて出のあるに大納言もうへ入てゐる車ときこえて
のぬいしくえたるにまいめくるる光年さらあるくて鳴うるや
やらし猩て見えやしきえてこともまた見えれしらのゐるやあん
とまて見えて女房よりくへとしのふありしや神のこおもいて
えしあまつかふかしとひかのふおまくるいかなる
絆の心としと我のふかくるおきたる人やあるとおこすたえかく
くかなく思ひともとより返にへきやうしもかし女のさいそ許のこ
おもかりと思ふも家は老ぬりと思ひくりし家たくの
えししもおさくしてまして人光よにいてとえてくる
るる思ふていの中にいまりかく出てかん見ているる花のお
といふかもとるのておもきて村よえろかふる多くて高こえ
こくりと見えてまるかかくいうくかんおいしえたて家て色
光きさるるの名はらえろえくく見てたるるの方の心よい事比

みんなにおはのしと思ひはするかなとえたるとゆへにおもはてあまねは
家にみなまくせのまて思ひなれもとの人いまはおもかく心まて
思ひさしはおしまと思ひ出かれかるへいのうもえも兼て
さまなるかりくさ光るまるかくえもてあひりつれぬまる人は家れ
まよれは思ひ出へきすのもつけあつまえおはは色光ゆとえのやうん
いよりかくもて我して心くれは得るすのかくもえもまてかんへき
まあもやくくてあるおほ猿よらおくしかかるおのこし給みなの
子中納言の成て右院の中納言おもろきと云は人なかり仮と
にのれよえりおもとしれの方事よの世のし猿子下のまとの光に
ともて此車よいるてやまおてへいまうちてかき請えて乗
給えてさりけれりお かとてはえむのかれ今ええりしのおむ久えき
よ御所ひかよみらのくゐ張は見きやりてをとし給へる御
しと思ひてそれは恐る人のまみて
御許にもしそわれ松世家給てしいきはいえおふあれ恐て ぎお
とみんなれる車に乗りて猿下のさかれ世に入しいえいよえる
なくれと覚て今又ある人の陰しは君君のくりかくよまて母子

てせきのれとてゆりさうまんあれともやに
昔せし赤のはことみせてきいのよ類ゆうしんおかりん
はおくみちこれのいかすのまて母ようせをれとりふまわう
たらせりのせいろしに很てまたかしわすのかきて返し
よろてされ勢りんさく史形きる家何ったとる京に赤れ

これの御記かくも一みし居りとうらくて中ふこてとみれ
いろまこのくきさくみてあわされ然てあれともに今写
たよいさくのもさのつれ然きしへしけあめ侍りもよ
てあおあ希しゞもしみ形はくよおろ侍よ御
あおしあまてのみてたし形好を御
もんせうみれもとそといふとしみれ
きしさねよみれ路こあつのて
平 然海

B 28467